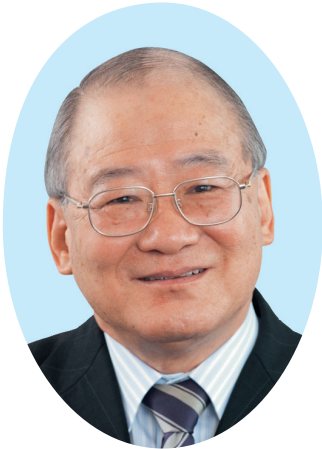


## 安全・安心な社会を目指して



淑徳大学 人文学部

教授 北野 大

Masaru Kitano

20世紀は安全を求めた世紀であったが、21世紀は安全・安心の世紀にすることが、第2期科学技術基本計画にも謳われている。安全はその時点、時点の自然科学に裏づけられた客観的事実、安心は自らの理解と納得に基づく主観的事実といえる。ちなみに安全の英訳は safety であるが安心に対しては適切な単語がなく、sense of security と訳している。安全を安心につなげるためには、信頼があり、安全×信頼=安心と表される。いくら安全を主張しても信頼がなければ安心に繋がらない。信頼性確保の一つの手段がリスクコミュニケーションである。

明治大学の向殿政男名誉教授の推進する学問に「安全学」がある。「安全学」であって「安全科学」、「安全工学」でないことに注意をされたい。「安全学」とは安全にかかわる技術的側面、人間的側面及び環境的側面を統合的に学問化するものであり、その前提として「機械は故障する」、「人は過ちを犯す」という考え方を持つ。

機械の故障に対してはそもそも安全を目標とするフェールセーフの考え方がある。一方、信頼性を高めるフォールトトレランスという考え方もある。現在、世界の原子力発電所は後者の考え方で設計されているが、3年前の福島第一原子力発電所の大事故を考えると、当然ながらフォールトトレランスの限界が見える。

「人は過ちを犯す」という考え方の対策には、本質的安全設計という考え方が大切である。まず、第1段階として危険源を可能な限りなくすこと、それでも残るリスクには第2段階として防御措置を講ずること、そして最後の第3段階が人間による注意である。

それではどこまで安全にすればよいのか？私は経営者の皆さんに次のような質問をしている。「現在、社員の皆さんにお願いしている仕事を、同じ条件（勤務時間、待遇、安全対策など）で、あなたの息子さんや娘さんにやらせますか？」

自信を持ってイエスと答える経営者がほとんどあってほしいが、現実はいかがであろうか。

良い会社とは、顧客から愛され、社員から愛され、ステークホルダーから愛され、そして地域社会から愛される会社であるという。社員から愛されるために何が必要か。経営者の判断に任せるが、大学人の端くれとして、私は淑徳大学の学生を常に自分の息子、娘と思って教育・指導している。経営者にあっては社員を自分の家族の一員のように遇することもその一つの要素になろう。

地域社会から愛される会社になるために、環境対策、特に排水管理も同様である。「その排水を下流で取水し、水道水として自分の家族が飲むとしたら、安心してその排水を流せますか？」という問いに対し、たとえばWET（全排水毒性）のデータにより、多くの経営者から Yes! という返事が返ってくることを期待している。